

# 生物多様性ちば ニュースレター

平成 19 年 3 月 9 日 No3・4

## 地球温暖化と生物多様性

(仮称) 生物多様性ちば戦略専門委員  
千葉県立中央博物館 副館長 中村俊彦

### はじめに

「北極の氷が2040年夏に消失」という予測が2006年12月にアメリカ国立大気センターから報告されてまもなく、2007年1月6日にニューヨークでは22.2という1月の観測史上最高の気温が記録され、サクラが咲いた。折しも英国気象庁が、これまでの世界の気象動向および太平洋のエルニーニョ現象等の状況から2007年の世界の気温は、平均を0.54度も上回る史上最高が予測されると異例の警告を出した直後の出来事である。このように地球温暖化現象はさらに加速状態にあり、私たち人間を含む多くの生物・生命に深刻な問題を投げかけている。

46億年と言われる地球の歴史のなかで、生命(いのち)の誕生は今から30-40億年前に遡る。この悠久時の流れを経つつ多種多様な生物が生まれ、またあるものは消えていった。現在記録されている生物は約170万種。しかし、現実にはその十倍以上の種が存在すると推定されている。この数千万にのぼる生物種をはじめ、遺伝子から群集・群落、さらには地球の生物圏全体に至る各レベルの生命のにぎわいとつながりの総体が生物多様性であり、私たちヒト(*Homo sapiens*)もその一員である。

生物多様性の内容は、その土地々によって異なる。

そして各地の生物多様性は、その地形・地質や気候等の無機的環境と一体となって機能する生態系を形づくる。私たちヒトは、その生物多様性を糧として生活・文化を築き、その歴史を刻んできた。人と自然、そしてこの両者のかかわりの所産として形成された文化とが一体となって調和・共存する生態系は、その時間的、空間的連続性によって維持・継承され豊かな人間社会を育んできた。

*Homo sapiens*(ヒト)とは、「賢い者」という意味である。この数万年の自然とのかかわりの歴史は、自然からの多くの恵みを得つつその脅威を克服し、さらにはこれを制御する手だてとして科学・技術を発展させた。しかし、この科学・技術に裏打ちされた社会は人々を豊かにしつつも、大量の資源・エネルギーを消費し、各地で自然環境の破壊・汚染をもたらした。生態系の劣化そして地球温暖化の原因になった。このような環境容量を超えた人間活動による地球温暖化は、各地の人為影響と相まって生物多様性を急激に損ない、私たち人間社会の将来に対しても資源・環境から生活・文化に及ぶかつてない大きな脅威をもたらしているのである。

### 地球温暖化現象とそのメカニズム

世界の平均気温は100年あたり0.74度の割合で上昇し、日本でもこの100年間で1.07度の割合で上昇している。この気温の上昇傾向はとりわけ最近の15-20年間で顕著であり、また高緯度や山岳地帯ほど大きい。したがって氷河や永久凍土については溶解・縮小が加速されてきた。またこのような温暖化は海域

にも及び、海水温の上昇や海流の変化にその影響と  
考えられる現象が出はじめている。

地球温暖化と関連して異常気象も多発化の傾向に  
ある。20世紀初めの30年を基準にしてのそれ以降の  
気象データをみると異常高温と異常小雨の増加傾向  
が確認される。最近では、2003年8月の中部ヨーロッ  
パを襲った異常高温は、熱中症の犠牲者が約2万人に  
のぼり、森林火災も多発し穀物生産は前年度の75%  
にまで低下した。2004年は日本列島の6月-10月に10  
回もの台風が上陸、7月には梅雨前線の集中豪雨で  
本州中部に大きな被害をもたらした。2005年8月には  
巨大ハリケーン「カトリーナ」が北米南部を襲い、  
ニューオリンズ市街を水没させるとともに約1000人  
もの犠牲者を出した。

地球温暖化にはいろいろな原因が考えられ、その  
メカニズムや異常気象との関係においては様々な調  
査研究が実施されている。その結果、地球温暖化の  
最も大きな要因として石油・石炭等の化石燃料や森  
林破壊等による二酸化炭素やその他の温室効果ガス  
の大気中への大量排出が考えられる。

「気候変動に関する政府間パネル(IPCC)」が2007  
年2月に示した第4次評価報告書第1作業部会報告  
書によると、新たに得られた観測値と精密な分析を  
もとに「人為起源の温室効果ガスの増加によって20  
世紀半ば以降に観測された世界平均気温の上昇のほ  
とんどがもたらされた可能性がかなり高い。」として  
いる。2006年時点での地球全体の平均CO<sub>2</sub>濃度は  
379ppmで、18世紀後半の産業革命前の濃度約280ppm  
より35%増加している。

また、「積雪面積や極域の海水は縮小。北極海の晩  
夏における海氷が、21世紀後半までにほぼ完全に消  
滅するとの予測もある。」「大気中のCO<sub>2</sub>濃度上昇に  
より、海洋の酸性化が進むと予測」としている。

#### 地球温暖化による生物への影響

2000年10月に千葉市の都市公園から見なれない大  
きなキノコが発見された。これは、オオシロカラカ  
サタケと言う毒キノコで元来は熱帯-亜熱帯域の種  
で、千葉県では1991年に館山市での記録があった。  
その後、このキノコは県内で毎年記録されるようにな  
り、最近では群馬県や石川県からも発見されている。



千葉市中央区青葉の森公園内に出現したオオシロカラカサタケ  
2001年9月3日 千葉県立中央博物館 吹春俊光氏 撮影

このように、少し前までは房総半島にはみられな  
かった南方系の生物が県内で発見される事例は多い。  
最近10年間に発見された(千葉に生息していると思  
えられる)蝶類だけでもナガサキアゲハ、クロコノ  
マチョウ、ウスイロコノマチョウ、ムラサキツバメ、  
ツマグロヒョウモンがあげられる。また夏にはしば  
しば北総地域でもクマゼミの鳴き声が聞かれるよう  
になった。

最近、ペットや園芸栽培など人為による移入が原  
因の外来種・帰化種の増加が著しい。これらは都市  
域に多い傾向にあるが、その多くは南方系の種、と  
りわけ本来の分布が東南アジアや中国南部、台湾の  
ものが多い。東京湾で発見されたミドリガイ、北総  
域の農業水路に繁殖するタイワンシジミ、南総域に  
定着したアカゲザルやキョン、またほぼ全県に広が  
るハクビシン、さらにインド・スリランカが原産の

ワカケホンセイインコ等である。

2002年以降、世界最大級のクラゲ、エチゼンクラゲが日本海側を中心に大発生し大きな漁業被害をもたらしている。最近では日本列島太平洋岸にも分布を拡大しつつあり、房総沖での被害も懸念されている。これについては、その発生の海、黄海の富栄養化と水温上昇が大きく関係していると推定されている。



ナガサキアゲハのメス 千葉県立中央博物館蔵 倉西良一撮影  
1940年代には九州や四国が分布の北限であったが、その後分布を徐々に広げ、2000年頃から南関東各地で見つかるようになった。千葉県では2000年以降、館山市、富津市、君津市で多くの個体が次々見つかって話題となった。2006年には千葉市内をはじめ千葉県各地において最も普通に見られる種となっている(倉西)。

温暖化の影響は、生物分布の北上とともに植物の開花時期の変化等にも現れている。千葉県のソメイヨシノの開花は3月31日前後であるが、近年では平年より一週間も早い開花もみられるようになった。全国一のナシ産地の千葉県であるが、その重要品種の「幸水」の開花はここ10年間に2.2-2.5日早まっており、果皮が未熟で果肉が先熟する現象もみられる。このように自生、栽培を問わず開花の早まり傾向とともに秋の紅葉や落葉の遅れ傾向もみられる。

温暖化は北方系の生物にとって大きな危機である。房総半島の北部や丘陵に分布・生育する氷期の残存

と推察される北方系の植物、すなわち房総丘陵の尾根に生育するヒメコマツ、ヒカゲツツジ、また北総域のため池や湿地に生育するミツガシワはいずれも千葉県以北または山地等の寒冷地に生育する植物であるが、最近の衰退傾向は著しい。この原因については、人為による生育地の開発や盗掘とともに温暖化の影響も大きいと考えられる。

### 地球温暖化予測と生物多様性の将来

2007年にIPCCが示した第4次報告書第1作業部会報告書によると、100年後の21世紀末(2090-2099年)には世界の平均気温は1980-1999年との比較で1.1-6.4 高まり、海面水位は19-58cm上昇すると予測している。2006年12月アメリカ国立大気研究センター(NCAR)の発表によると、加速する地球温暖化によって北極の氷の溶解速度は従来予測の4倍になり、2040年の夏にはグリーンランドとカナダ北部海岸沿いを除き北極の氷は消失すると予測した。これらは当然、干ばつや集中豪雨等の異常気象、また海水面上昇による低地の水没や干潟・砂浜、磯の消失、さらには高潮の増加等を伴うことも予想される。

地球温暖化によって日本の主要都市では、今後100年間の気温上昇は2-3 に及ぶと予測されている。千葉県の年平均気温は南部で15.5、北部では14.0であるが、今世紀末には16.0 から高い所では18.5 となり、この高い所の値は現在の鹿児島市の年平均を上まわる。温暖化は、人口の集中する都市部においては地表面のコンクリート化や暖房等の人工熱の放出などの影響もあり、とりわけ顕著であった。いわゆるヒートアイランド現象である。これまでの地球・生命の歴史においても極めて異常な速度で進んでいる地球温暖化の影響は当然生物及び生物の息遣い・生育に甚大な影響を及ぼすとともに私たち人間の健康をはじめ生活・生存に大きな危機をもた

らしかねないのである。

中部日本における気温の年平均2-3℃の上昇の予想は、現在の気象条件が水平距離にして300-400km北に移動し、また標高では330-500m上昇することになる。したがって現在は房総半島南部に留まっている動植物は今後県全体に広がり、これまで分布していなかった新たな生物が南から進入する。一方では氷期の残存種や北方系の種はより北に移動して行かなければならない。しかし、急激な温暖化は移動力の小さい動物や植物には致命的で徐々に衰退、消滅する種も多いであろう。

現在、県の北部や丘陵地に多い落葉広葉樹林については、生育の適地が大きく狭められと考えられる。街路樹にも多く植栽されているケヤキでさえも県内全てが不適地となると推定される。当然、落葉樹林の構成種のカタクリやイチリンソウに代表される北方系の林床植物は生理的に厳しく、また南方系の種との競争関係においてもその生育は厳しくなると推察される。動物においては、温暖化とともに寒冷地への移動も考えられるが、たとえ移動力の大きな動物においても移動経路の分断が大きな障壁となる。

海域についても、水温上昇をはじめ海水面の上昇、また氷河が溶けて淡水が海に流れ込むことによる塩分濃度の低下や海流の変化等、生物環境も大きく変化する。房総半島の砂浜海岸で産卵するアカウミガメにとっては、海水面の上昇に伴う砂浜の水没によって産卵場所が失われる。さらに個体の性決定が温度依存のため、卵の周辺の砂が高温になると雌の比率が上がり、胚発生時の温度が29℃を越えるとすべての個体が雌化してしまう。

### 人々の健康や生活環境にかかわる危機

温暖化がもたらす氷河の溶け出しや海水の膨張は海水面を上昇させ海岸低地を水没させる。たとえ

堤防により水没を免れたとしても集中豪雨や台風の異常気象と相まって高潮など海岸域を中心に対し風水害の危険が増すことは避けられない。また、夏期の高温は人にとっては大きな生理的ストレスであるばかりか体力の消耗による熱中症の増加も懸念される。70年後の日本では最高気温が30℃を越える真夏日は約3倍になり、最低気温が25℃以上の熱帯夜は3-7倍になると予測されている。熱中症等直接的な人々への健康被害はさらに増大すると考えられるが、人ばかりでなく家畜や家禽にとっても影響を受ける。家畜も日最高気温が33-34℃を上まわると熱中症が多発する。とりわけ乳牛のホルスタインでは、適温域の上限15℃を越えると乳量や乳質が低下することが指摘されている。

温度上昇に伴う動植物の移動については、南から多くの生物が進入することは避けられない。その中には熱帯・亜熱帯に多く分布する感染症の病原体をはじめその媒介動物や毒生物も多く、鳥インフルエンザのように野生から飼育動物、さらには人にまで感染し大きな被害をもたらす生物の分布拡大は大きな脅威である。

温暖化とCO<sub>2</sub>濃度の高まりは、炭酸同化作用（光合成）で光エネルギーを固定する植物にとっては、生長速度および生産力が高まる状況もある。しかし、これは目的生物の制御を目指す農林漁業にとっては深刻な問題となる。すでに近年多発する世界各地の干ばつや水不足は大きな被害をもたらしており、将来的には南方から侵入する新たな病害虫被害も懸念される。また温暖化は雑草の繁茂をきたし、その防除への負担も大きくなる可能性も高い。

農林業において栽培されている多くの品種にとって温暖化は生理的ストレスであり現在の農地・林地は不適地になる可能性が高い。イネの結実については、出穂後40日の平均気温が21-22℃が最適であり、

現在は東北日本で単位面積当たりの収量が最大になっている。温暖化による夏の気温上昇はイネの収量にとっては負の要因である。また、ナシ等の落葉広葉樹の栽培については、温暖化で県内の適地はほとんどなくなる。さらに植林木についても、現在の品種は温暖化によって生長が速まる一方、材質の変化や病害虫に対する抵抗力の弱まりも考えられる。

海の環境についても氷河が溶け淡水が海に流れ込む状況になれば、海水温や海流に変化をきたし、海の生物相および生態系が大きくに変化する。これは、当然、魚介類や海藻の分布・生態に影響を及ぼし漁業生産の量および質へ影響すると考えられる。

### 地球温暖化対策と生物多様性保全

地球温暖化について国際的に対応が討議されはじめたのは 1980 年代の後半からで、1990 年には「気候変動に関する政府間パネル (IPCC)」の第一次評価報告書が発表された。1992 年のブラジルでの「地球サミット」では「気候変動枠組条約」が採択された。1995 年に IPCC の第二次評価報告書が完成し、1997 年「地球温暖化防止京都会議」が開催され「京都議定書」の採択によって参加各国の 2008 年から 2012 年までの温室効果ガス排出量に関する数値目標が設定された。この議定書は、2004 年 11 月にロシアが批准したことにより発効条件が整い 2005 年 2 月 16 日に発効した。これは 1990 年における排出量に対する目標値であり、我が国全体で温室効果ガスを 6 % 削減することが日本に課せられた法的拘束力のある国際約束となった。

日本においては 2002 年「地球温暖化対策推進指針」及び「地球温暖化防止森林吸収源 10 力年対策」、さらに 2005 年「京都議定書目標達成計画」をつくり、業務および家庭での省エネルギー対策や省エネルギー技術の開発、また森林の整備および適切な管理に

よる森林の温暖化防止機能の向上等に対する対策が推進されている。千葉県においても 2000 年に「千葉県地球温暖化防止計画」を策定し地域から地球環境の保全に貢献するという理念のもとに積極的な取り組みをおこなってきたところであるが、国内外の状況の変化や県内の温室効果ガス排出量の増加を受けて、同計画の改定を行い一層の取り組みの強化を図ることとした。

生物多様性及び生態系を守り伝えるための国際的取り組みは、1992 年の「地球サミット」において「気候変動枠組条約」とともに採択された「生物多様性条約」からである。これにおいて遺伝子、種、生態系の 3 つのレベルの生物多様性の保全・再生が謳われ、日本は 1993 年に加盟した。そして 1995 年に「生物多様性国家戦略」を制定、2002 年には更なる充実のため「新・生物多様性国家戦略」を策定した。

千葉県における生物多様性にかかわる取り組みについては、天然記念物や自然公園、鳥獣保護区、自然環境保全地域等の指定をはじめ、博物館における自然誌資料の収集・保存、調査研究のほか、県史「千葉県の自然誌」の編纂、ビオトープ推進事業、「千葉県の保護上重要な野生生物」の植物編及び動物編の作成等生物多様性の保全・再生にかかわる様々な事業を展開してきた。しかしながら、様々な開発行為や農林漁業の変貌そして地球温暖化等によって私たち人間を含む生物多様性は現在大きな危機に瀕している。この生物多様性の保全・再生の対策は人間社会の将来にかかわる重要課題であり、それには迅速な現場情報の収集・解析に基づく確かな対応が求められる。このような千葉県の生物多様性について、その現状と課題を整理し、保全・再生への具体計画とその実施体制づくりのための戦略、すなわち「(仮称)生物多様性ちば県戦略」を 2007 年の完成を目指し策定中である。

参考文献

- 堂本暁子・岩槻邦男編. 1997. 温暖化に追われる生き物たち. (築地書館).
- 吹春俊光. 2001. 地球温暖化ときのこと. (千葉県立中央博物館友の会ニュース No44).
- 環境省編. 2002. 新生物多様性国家戦略. (ぎょうせい).
- 丸山誠. 2003. 地球温暖化の影響か? 蝶の北上. (おおとね No72).
- 千葉県史料研究財団編. 2004. 千葉県の自然誌本編 8 変わりゆく千葉県の自然. (千葉県).
- 内嶋善兵衛. 2005. 新地球環境とその影響. (葦華房)
- 東京大学海洋研究所編. 2006. 海の環境 100 の危機. (東京書籍).



環境づくりタウンミーティング  
総括大会

NPO法人千葉まちづくりサポートセンター副代表  
栗原裕治

開催の経緯及び趣旨

昨年末の12月23日(土),千葉県内の18市民グループの主催による各地の環境づくりタウンミーティングの締めくくりとして,環境づくりタウンミーティング総括大会が開催され,堂本知事,生物多様性ちば県戦略専門委員をはじめ関係者170人が千葉県立中央博物館 講堂に集まった.午後1時に始まったプログラムの最初から会場全体が熱気に包まれ,午後4時30分の終了予定が1時間も延長された.



国主催のタウンミーティングが,やらせや形式偏重等,いろいろ問題視されている時期だったが,千葉県では短期間に40を超える環境団体がほぼ3ヶ月という短期間に結集し,千葉県環境再生計画,千葉県環境学習基本方針,ちば環境基本計画の見直し,及び生物多様性ちば県戦略の策定に向けて,自由かつユニークな内容のタウンミーティングが展開され,数多くの論点が提起された.それは,千葉県の環境団体のネットワークの広がりや底力を示すものであ

り、これからの地方自治体の運営に市民参加が不可欠であることを改めて感じさせた。

この総括大会は、これまでの環境づくりタウンミーティングでの意見・提案が、言いつばなし、聞きつばなしにならないように、関係者が一堂に会して千葉県環境づくりの課題・論点を整理し、それらを共通認識として共有することで今後の政策的確に反映させていこうという趣旨で開催されたものである。

### 堂本知事の挨拶

堂本知事は、総括大会の最初から最後まで熱心に耳を傾け、積極的に発言された。



冒頭の挨拶では、まず、知事就任時に生物多様性の問題に取り組みなかったこと、時間がないところでタウンミーティングが行われるに至ったことを詫言われた。また、生物多様性は、自分にとって1992年の地球サミットの以前から取り組んできたもので、一番大事に考えてきたと、続けた。そして、「時間はありませんが一緒につくっていきましょう。これまで、環境について皆さんが動いてきたことを集約して、計画としてつくり上げていきましょう。生物多様性の戦略を県レベルで持っているところはないので、他の県をリードできるような戦略になればと思います。今後全力投球していきます。」と呼びかけた。

### 各タウンミーティングの報告と論点整理

各タウンミーティングの主催グループを代表して、18人がそれぞれのタウンミーティングの報告を行った。各報告時間が3分間と短かったこともあり、事前にまとめ資料が配布された。



金親博榮さん、佐野郷美さん、手塚幸夫さんの3名が、各報告及び会場からの発言も含めて論点整理を行った。金親さんは、農家・地主の立場から里地・里山の問題に取り組んできており、佐野さんと手塚さんはいずれも県立高校の生物の先生で、それぞれ葛南地域、外房地域で環境の保全・再生の活動に関わってきている。



この論点整理では、生物多様性にとって一次産業や里山・谷津田の保全・再生が重要であること、ごみ問題の解決や無駄な開発行為を規制する必要があること、農業政策や都市政策の問題でもあり市町村とも連動した全庁・全県的な取り組みが必要なこと、点で考えるのではなく水や緑のネットワークが重要

なことなどが指摘された。

最後に金親さんが、一次産業をどうするのか（都市住民との協力，ボランティアの吸収），都市の環境づくり（谷津田，コリドー，点から線・面へ），行政部門の組み直し（コントロールセンターとしての環境部門の自立），開発派・産業派と環境派の対話・交流（叩き合いでも逃げない覚悟と仕組み），公的分野での官と民の分担，地球温暖化の視点，不法行為への対応（関係者や行政職員のコンプライアンス），実践につなげる具体的な方策，県行政部門や市町村への浸透，子孫への問題，海から陸や都市を見る視点，以上 11 項目が重要であると整理した。

### パネルディスカッション

論点整理を受けてパネルディスカッションが行われた。パネリストは、堂本知事，生物多様性ちば県戦略専門委員会の大澤会長と原副会長，また，県民の立場で千葉市と四街道市で環境タウンミーティングを主催した小西由希子さんと任海正衛さんの 5 名。会場からの意見もあり，会長・副会長以外の生物多様性ちば県戦略専門委員 5 名の会場からの発言もあった。



パネリストや会場からの発言を要約すると，

環境保全と農業が両立する，しかも生計が立てられるシステムが必要。地産地消も大切。

都市住民と農家が協力できるようになるには，相互の理解と無責任にならないボランティアの仕組みが必要。行政に頼らない市民自治が大切で，NPOも自立して持続的な事業を展開する必要がある。

生物多様性の保全は文化であり，生物と文化の多様性が重要。そのために関係部局を横断的に加えていく必要がある。あらゆる視点に環境を入れていくのがこれからの政策の基本。

実態を把握するために基本調査を行い，マップ化する。生物多様性の基盤づくりの推進が大切で，そのために生物多様性センターが必要。また，センター機能とセットで，生態の区分や住民の分布・生活を照らし合わせ，地域の再編，再考しての拠点づくりが重要。今回のタウンミーティングで結集した市民の力が拠点づくりに生かせる。環境学習では，地域の人との実践も大切。県は文書が多すぎて職員がそれに忙殺されて，同じ予算，同じ事業の繰り返しが多い。市民も参加して県の事業をふり返ることを提案する。

つくり上げた計画を市民と行政とが協働で推進する。それには目標値と評価が必要。

環境の地域通貨，ナショナルトラスト，水源税，環境コミュニティファンド，不法投棄の検査システムなど，検討すべき制度や仕組みは多い。猪などの害獣対策も重要。猪が増えていることで蛇やカエルが減ってきている。

〔生命〕を守る仕組みを考え，提案していきたい。書き込みができ，みんなで見ることのできる生物多様性サイトをつくる。

短時間に詳細を詰めることはとても無理だが，ど

うやら千葉の環境づくりの方向性が見えてきたように思われる。

以下は、司会者のまとめである。

これまでの日本は、環境、人格権などを犠牲にして経済成長を遂げてきた。確かに便利になったが、人間はそれで本当に幸せになったか 昨今のいじめの問題といい、無責任な大人の言動など、心の荒廃がすすんでいるように感じられる。

これからは地方分権・地域主権の時代といわれている。住民を核に地域の主体が協力して、いろいろ決めていかなければならないのに、なかなか決められない現実がある。

ずいぶん前から茶の間の中心にテレビが据えられていて、そこからは編集された情報が入ってくる。都市開発によって新住民といわれる人も増えた。そうした中で、住んでいる地域の歴史、地域の資源(お宝)、地域の課題を知らない、無関心な住民が増えていく。問題意識を持っている人はいつも一握りで、あちこちで同じ人だけが集まっている。これでは地域ぐるみの合意形成や協働はとても難しい。

これまでの経済・産業社会を見直し、環境や人格権を重視した持続可能な社会を構築できるのは、経済力でも政治力でもなく、文化力であろう。日本の社会は、グローバルな産業文化が蔓延し、地域を知らない人、無関心な人の増加が、地域の文化力をますます衰退させている。それが環境破壊を招いているように感じられてならない。これからは地域を知り、地域の文化力を皆で高めていく取り組みが重要な時代ではないでしょうか。

## カエルツボカビ症 日本上陸

### 拡散予防の徹底を！

オーストラリアや中米のカエルなどの激減・絶滅を引き起こしていると考えられている「カエルツボカビ症」が、2006年12月、日本でも確認されました。これは、個人がペットとして飼育していたカエルの死体が、獣医師を通じて麻布大学獣医学部病理学研究室に持ち込まれ、診断の結果、明らかにされたものです。

ツボカビ症は、真菌の一種によって引き起こされ、致死率が高く、伝播力が強いために世界中で猛威をふるい、すでにオーストラリアや中米の両生類が壊滅的な打撃を受けています(人には感染しません)。現在のところ、日本における野外での発症は確認されていませんが、今後、野生の両生類にこの病気が広がった場合、日本の自然環境や農林業は、深刻な影響を受ける可能性があります。昆虫などを主な食べ物にしているカエルが、水田などの環境から姿を消した場合、農林業に被害を及ぼす害虫などが、大量に発生する可能性があります。カエルツボカビ症は、日本の生態系を根幹から揺るがす、未曾有の大問題です。

カエルツボカビ症は、一度、野外に広がったらそれを收拾する手立てはありません。この問題が、深刻な事態を全国で引き起こすことになるかどうかは、現時点で拡散の予防が徹底できるかどうかにかかっています。詳しくは、下記のHPをご覧ください。

WWF ジャパン

<http://www.wwf.or.jp/chyt2007/>

事務局報告

第3回『(仮称)生物多様性ちば県戦略』専門委員会  
が2006年12月18日(月)に開催されました。



議題としては、(1)環境保全等に係る取り組み事例  
について、(2)タウンミーティングにおける意見の  
概要について(中間報告)、(3)提言の構成案につ  
いて、(4)その他

環境保全の取り組み事例については、千葉県農林  
水産部みどり推進課から里山保全の取り組みについ  
て、千葉県県土整備部河川計画課から印旛沼の環境  
保全の取り組みについて、千葉県立中央博物館から  
はフィールドミュージアムの取り組みについて、市  
川市からは自然環境保全再生指針の策定についてそ  
れぞれ説明をいただきました。

議事要旨は、千葉県環境生活部自然保護課のHP  
[http://www.pref.chiba.jp/syozoku/e\\_shizen/tayo  
sei/inkai/181218inkai/181218giji.pdf](http://www.pref.chiba.jp/syozoku/e_shizen/tayo_sei/inkai/181218inkai/181218giji.pdf)  
で公開しています。

第4回『(仮称)生物多様性ちば県戦略』専門委員会

が2007年1月15日(月)に開催されました。

議題としては、(1)タウンミーティングにおける意  
見の概要について(2)提言の構成案について(3)  
その他。

今回の専門委員会より金親博榮氏、佐野郷美氏、  
手塚幸夫氏がオブザーバーとして参加されることにな  
りました。

第5回『(仮称)生物多様性ちば県戦略』専門委員会  
が2007年2月24日(土)に開催されました。

議題としては、(1)提言案について(2)その他。

委員会の当日配布された資料、議事録等は下記の千  
葉県環境生活部自然保護課のHP で閲覧可能です

[http://www.pref.chiba.jp/syozoku/e\\_shizen/index.html](http://www.pref.chiba.jp/syozoku/e_shizen/index.html)

このニュースレターに関する質問・要望・意見等ございま  
したら、[kuranishi@chiba-muse.or.jp](mailto:kuranishi@chiba-muse.or.jp) または、千葉県環  
境生活部自然保護課 [hogo10@mz.pref.chiba.lg.jp](mailto:hogo10@mz.pref.chiba.lg.jp) までお  
願いたします。

生物多様性ちば ニュースレター  
No3・4(合併号)

発行日:平成19年3月9日

発行:千葉県環境生活部自然保護課・

千葉県立中央博物館

編集担当:倉西良一・熊谷宏尚

千葉県環境生活部自然保護課

〒260-8667 千葉市中央区市場町1-1

TEL:043-223-2957 FAX 043-225-1630

千葉県立中央博物館

〒260-8682 千葉市中央区青葉町955-2

TEL:043-265-3111 FAX 043-266-2481